からり、とカクテルグラスの中で氷が崩れた。
幸せそうな空気を漂わせていたカップルが、ドアの向こうに消える。一瞬だけ顔を出す暗い外界は、降りしきる雨でけぶっていた。
セブンスターに火を点ける。肺一杯に紫煙を吸い込み、灰皿に灰を落とす。
ウチ、どこで間違えたんかなぁ……。
ニコチンに視界がパチパチと爆ぜ、ギムレットを飲み干し、じっとりと瞼を降ろす。
尿意を覚え、トイレを探す。カウンターしかない店の奥に看板が見えた。
席を立つ。私しかおらん店内に、こつこつと足音が響く。
ドアを開け、閉める。下を脱ぐ。機械仕掛けの水洗音が出迎えてくれた。
腰を下ろし、はぁと息をついた。
太ももに肘をつき、目線を下にやる。アイツの好みに合わせた色の下着が目に入った。
「……帰ろ」
思わず独り言つ。帰ってもしゃあない、何も変わらん。そう分かっているのに。
アイツはウチを呼び止めた。熱くなった体のために、ウチを求めた。
がちゃり、とドアノブを回した。
「お待たせ致しました」
カウンターに客がおった。
長い黒髪を一つ結びにして、メリハリのきいた体をした女性やった。きりりとした目がウチを見る。
店内に流れる曲が変わった、いや、変わってない。
『ラプソディ・イン・ブルー』が転調する。

夜の雨

南風　こまち

ごろり、と夜空に遠雷がこだました。
甘い雰囲気を醸していたカップルが、ドアの向こうに消える。一瞬だけ口を開くラブホの内側は、終わらない夜を演出する色合いだった。
雨粒でキャメルの火が消え、味がゆっくりと死んでいった。死んでしまったそれを水溜りに吐く。肺の中に冷たく湿った空気が流れ込む。
私は、どこで間違えたのだろうか……。
すれ違う車の灯に視界が眩み、気怠げに瞼を動かす。
喉の渇きを覚え、行く当てを探す。路地の奥にぽつん、とバーの看板が見えた。
足を速める。雨が靴に浸み込んで、ぎゅうと音を立てる。
ドアを開け、閉める。外套を脱ぐ。穏やかなマスターの女声が出迎えてくれた。
腰を下ろし、ふぅと息を吐いた。
カウンターに肘をつき、目線を下にやる。投げ出した仕事用の鞄が目に入った。
「……辞表出すか」
思わず独り言つ。出しても仕方ない、何も変わらない。そう分かっているのだが。
マスターを呼び止める。雨で冷えた体のために、アイリッシュコーヒーを求めた。
ことり、とグラスが差し出された。
「お待たせ致しました」
トイレから客が出てきた。
黒い癖っ毛をショートにして、小柄ですらりとした体躯をした女だった。丸くかわいらしい目が私を見る。
店内に流れる曲が変わった、いや、変わっていない。
『ラプソディ・イン・ブルー』が転調する。

「ふむ、それは酷い話だな」
「やろ！？　ほんま、やってられんわ……」
　女性は梅辻と名乗った。さっき店に入ってきたばかりの相手に、ウチはガンガンギャアギャアと愚痴った。
「そんでもって、縛りの次はローソクやとぉ？　図に乗んなや、このエロガキ！　こっちは痛いばっかりで一つも気持ちよくないんやボケ！　って言うてやったんよ。そしたら、お前みたいな貧相な体なんてこっちから願い下げや、って言われてなぁ。大喧嘩になってしもうて」
　ノリノリなＢＧＭに背中を押され、ウチはアイツのことをぶちまけた。見ず知らずの相手にわめくのはリスキーでもあり、それがまた気持ちよかった。
「ほんま、ムードも何もありゃせんわ」
　ウチは吐き捨てるように言って、セブンスターの箱を探った。空やった。見かねた梅辻さんが一本くれた。
「あ、おおきに。優しいんやな、あんた」
　新しい煙草に火を灯し、普段と少し色合いの違う紫煙を上げるウチの横で、梅辻さんは遠い目をしながらアイリッシュコーヒーを飲む。
「にしても、梅辻さんってきりっとしてカッコええなぁ。優しいし。ウチのヒモに代わって彼氏にならん？」
　梅辻さんは軽い苦笑いを浮かべた。アルコールのせいか頬が少し赤らんでいる。
「優しいなんて褒められたのは何年振りだろうな。一介の淋しい女だよ、私は」
　意味がよく分からんかったのを、カクテルグラスを空にすることでごまかした。
「なぁ、今度は私の話を聞いてくれるか？」
「お、ええで。聞かせてや」

＊

「ふむ、それは酷い話だな」
「やろ！？　ほんま、やってられんわ……」
　女は鶴迫と名乗った。既にだいぶこの店で呑んだようで、放たれる愚痴はとどまるところを知らなかった。何でも、同居している彼氏と大喧嘩をして飛び出してきたそうだ。話を聞いていると、初めは体だけの関係だったのがずるずると同居に持ち込まれたようだ。
「……そしたら、お前みたいな貧相な体なんてこっちから願い下げや、って言われてなぁ。大喧嘩になってしもうて」
　景気のいい音楽に勢いづけられ、鶴迫さんは恋人のことをぶちまけた。初めて会った相手のことを延々聞くのは仕事で飽き飽きしていたが、今は不思議と引き込まれていた。この人は誰かに似ている、ような。
　ほんま、ムードも何もありゃせんわ。彼女はそう吐き捨て、煙草の箱を探った。中身は空のようだ。私は見かねて手持ちのキャメルを一本差し出した。
「あ、おおきに。優しいんやな、あんた」
　優しい、か。そう言われたのは随分久しぶりだ。旨そうにキャメルを吸う鶴迫さんの隣で、私は少しぬるくなったアイリッシュコーヒーを啜る。
「にしても、梅辻さんってきりっとしてカッコええなぁ。優しいし。ウチのヒモに代わって彼氏にならん？」
　どきりとして、頬に血が廻った。……似ている。そうだ、彼に似ている。苦笑でお茶を濁すほどに。
「優しいなんて褒められたのは何年振りだろうな。一介の淋しい女だよ、私は」
　私はそっと、すっぴんになった左手の薬指に目をやる。
「なぁ、今度は私の話を聞いてくれるか？」

＊

「私は仕事ばかりでな……」
今度はウチが愚痴の聞き役に回った。どうも仕事場での人間関係が上手くいっていないみたいだ。そのうえ、勤め先自体がかなりブラックなようだ。梅辻さんの顔をよく見ると、化粧で分かりにくいけどあまり寝ていないみたいだ。
梅辻さんはキツそうな微笑みを見せて、カクテルを飲み干した。長い一つ結びが体の真後ろで揺れた。
「そんなとこ、さっさと辞めてしまえばええやん」
ウチはケロリと言ったが、梅辻さんは少し渋い表情をした。
「一人ではその、荷が重くてな」
ウチは首を縦に振って、梅辻さんは新しいキャメルを咥える。火を切らしてしまったみたいやった。
「火、無いん？　これ使いや」
ウチが差し出すライターの火に、彼女はそっと咥え煙草を近づける。少し薄くもハリの強そうな唇が、火と口紅でてらりと輝いた。
「すまないな」
「ええねん、これくらい。さっき一本もろたしな」
そう言って笑う。でも、そこから梅辻さんの表情が少し変わった。驚きと、郷愁のような。
「どないしたん？」
本人は気付いていなかったみたいで、慌てるように少し顔を背けてから言った。
「申し訳ない、その……昔の男と似ていたものでな」
意外やった。男がいそうな雰囲気やないのに。
「ほ～ん、それはぜひ聞いてみたいなぁ」
ウチは茶化したけど、梅辻さんは少し目を伏せた。

＊

「私は仕事ばかりでな、もう何年も仕事仕事だ。昔からぶっきらぼうな口の利き方しかできないせいか、後輩には懐かれず、上司には疎まれてばかりさ。それだけなら構わないが、ここ最近は終電帰りが当たり前、上司も私が断れないのをいいことにこき使うばかりさ。今日はたまたま終電前に解放してもらえた」
ふ、と自嘲の笑みを浮かべてグラスを空にする。愉快な話し相手のおかげもあって、雨で奪われた体温は戻っていた。
「そんなとこ、さっさと辞めてしまえばええやん」
「全く、その通りだな。……しかし、何かをやめたり、変えたりするのは一人ではその、荷が重くてな」
頷く鶴迫さんをよそに私は煙草に火を灯そうとしたが、生憎マッチを切らしてしまった。
「火、無いん？　これ使いや」
鶴迫さんがライターの蓋を開けた。火が彼女の丸くてくりくりした目を輝かせ、瞳孔に深みを与える。一言礼を言うと、彼女はにかりと人懐こい笑みを浮かべた。
その笑みに、私は思わず彼の面影を重ねていた。
鶴迫さんは私の目線に気付いたのか、少し訝しむ表情をした。
「どないしたん？」
私はじろじろ見てしまったことを少し申し訳なく思い、少し顔を逸らした。
「申し訳ない、その……昔の男と似ていたものでな」
すると鶴迫さんは少し面食らった表情をして、そしてにやにや笑い始めて続きをせがんだ。
「別段、大した話じゃないさ……呆気ない話だ」
普通は誰にも話さない。でも、今の私は口軽だ。

＊

ウチはモヒートを、梅辻さんはカンパリオレンジをオーダーした。薄黄色と薄橙色のカクテルに満たされたグラスを合わせ、飲む。ライムとミントの爽やかさがラムに乗って喉奥に消える。

恋人とは婚約するほど仲が良かったものの、数年前に交通事故で亡くしたらしい。そこからひたすら仕事にのめり込み、今に至るそうな。

「そら、えぐいわ……」

かける言葉を失ったウチは、つまみのアーモンドを口に運んだ。気が付くと、『インスピレーション』がＢＧＭになっている。

「悪いな、辛いことを聞いてしもうて。さすがにウチはそこまでの経験は無いけど、気持ち分かるで。ちょびっとだけやけどな。それで仕事仕事て……今までよう頑張ったやん」

少しオーバーかもしれんけど、酒の勢いかも。梅辻さんも嫌そうな顔やなかった。

「お客様、そろそろラストオーダーのお時間でございます。いかがなさいますか？」

「え？　うわ、あかん！　もうこんな時間や、終電無いやんけ……まあええか」

互いに終電を逃した女二人、酒でとろけた顔に揃って笑みを浮かべるしかなかった。

ウチはマスターにおススメを聞いた。すると、コンクラーベとかいう変な名前のカクテルを紹介してくれた。

「オレンジジュースをベースにした甘めのノンアルコールカクテルで、酔い覚ましにおすすめです」

「ほな、それ二つ」

「かしこまりました」

＊

私はカンパリオレンジを、鶴迫さんはモヒートを注文した。グラスを合わせ、めいめいに薄橙色、薄黄色の酒を口に運ぶ。カンパリの渋みとオレンジの芳醇な甘さが合わさり、ほろ苦さとなって口腔を満たす。

「彼は数年前に交通事故で死んでしまって、そこから仕事にのめり込むようになった。それで今はぼろ雑巾さ。婚約まで決まり、新婚旅行の打ち合わせをしているさなかだった」

短くなったキャメルを灰皿に押し付け、火を揉み消す。いつもよりも早いペースで煙草を灰にしている。

「そら、えぐいわ……」

私の話下手が災いして、鶴迫さんとの間に沈黙が降りた。

鶴迫さんは同情してくれた。慰めてもらうのも久しぶりだ。アイリッシュコーヒーを飲んだ時のように、体の芯がじんわりと暖まった。

「お客様、そろそろラストオーダーのお時間でございます。いかがなさいますか？」

「ん？　ああ、もうこんな時間か。終電には間に合わないな、仕方ない」

互いに終電を逃した女二人、酒でとろけた顔に揃って笑みを浮かべるしかなかった。

「マスター、なんかおススメある？」

彼女は小さくも均整の取れた体をカウンターの向こうに乗り出すようにしながら聞いた。

「では、コンクラーベはいかがでしょう？　オレンジジュースをベースにした甘めのノンアルコールカクテルで、酔い覚ましにおすすめです」

〆が決まった。

＊

コンクラーベはオレンジジュースと牛乳、木苺のシロップをベースにしたカクテルやった。
「結構甘いんやな、これ」
梅辻さんもウチの言葉に釣られて飲むと、少し驚いた顔をした。
「はぁ……人生もこれくらい甘かったら、どんなにいいだろうか」
横の女性は、あまり柄にもなさそうなことを言った。
「まあまあ、人生そんなに捨てたもんやないで。ほら、こんな旨い酒が飲めるやん」
「ノンアルじゃないか、これ」
「やかましい！」
ウチはケラケラと、梅辻さんはニヤリと笑い合った。
「帰りたないなぁ……」
「行きたくないな……」
相手の顔を見る。凛々しい目がじっとウチを見つめる。
「……二人で変えてみん？」
「えっ？」
「さっき言うたやろ、『一人やと荷が重い』って。せやったら、二人ならどうやろうって」
ウチはコンクラーベを飲み干す。頭の中でアイツが何かを言おうとしたけど、もう顔すらも酔い霞で見えなかった。
「ほら、ウチもひとりぼっちやし」
彼女は黙りこくって、コンクラーベを飲み干した。
「二人で変えるって……何をだ？」
「まぁ……縁、やろか」
「縁？」
「せや」

＊

ＢＧＭはいつの間にか『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』になっていた。
「結構甘いんやな、これ」
鶴迫さんの言葉が気になり飲んでみると、想像以上に甘かった。
「はぁ……人生もこれくらい甘かったら、どんなにいいだろうか」
「まあまあ、人生そんなに捨てたもんやないで。ほら、こんな旨い酒が飲めるやん」
私らしくない泣き言に、彼女は元気に励ましてくれる。
「ノンアルじゃないか、これ」
「やかましい！」
笑い声が止み、どちらからともなく言った。
「行きたくないな……」
「帰りたないなぁ……」
相手の顔を見る。くりくりした目がじっと私を見る。
「……二人で変えてみん？」
「えっ？」
鶴迫さんはいたずらっぽく笑った。
「さっき言うたやろ、『一人やと荷が重い』って。せやったら、二人ならどうやろうって」
ウチも一人ぼっちやし、と付け加える彼女の姿に、どうしても彼の面影を重ねずにいられない。いや、自分を重ねているのか？　私は黙りこくって、半分くらいになっていたコンクラーベを飲み干す。
「二人で変えるって、何をだ？」
「まぁ……縁、やろか」
「縁？」
「せや」

＊

「今夜は帰らん。ウチは今夜限りアイツと縁を切って、あんたは明日寝坊してクソ会社と縁を切る」
「え、縁を切るって、そんないきなり」
「そんなことをすれば、ウチもあんたもひとりぼっちや。そんな寂しいのはイヤやろ？　やからお互い一緒になって、うまいこと仲良うやればええやん。な？」
アホなこと言ってんな、ウチ。けど、ウチを選んでくれたら。たぶん、帰らんでもいい。
「尻込みせんでええ。ウチがおる」
アホ言うな、の一言で切り捨てられるとも思ったけど、梅辻さんは今までになく笑い出した。涙を拭いながら頷いた。
「いいな。気に入った。お前にも私がいる」
ウチはニッと笑い、立ち上がる。
「マスター、おあいそ！」
立ってレジを済ませ、外へ。割り勘になった。
「足元、大丈夫か？　フラフラじゃないか」
「だいじょーぶらいじょーぶ！」
ドアを開けてもらうと、冷気と一緒に雨の匂いがした。
「大丈夫なわけがないだろう、ほら、つかまれ」
「あーん、梅辻さん頼りになるわ、惚れてまうでこんなん」
差し出された腕につかまろうとしたけど、目測を誤ったのと足元が滑りやすくなっていたのとで、ひっくり返りそうになった。
「おっと、ほら、言わんこっちゃない」
ウチの体を出迎えたのは冷たく濡れたアスファルトやなく、ぽかぽかで柔らかな女の肌やった。
「……あ、ありがとな」

＊

「今夜は帰らん。ウチは今夜限りアイツと縁を切って、あんたは明日寝坊してクソ会社と縁を切る」
「え、縁を切るって、そんないきなり」
「そんなことをすれば、ウチもあんたもひとりぼっちや。そんな寂しいのはイヤやろ？　やからお互い一緒になって、うまいこと仲良うやればええやん。な？」
完全に目が据わっている。しかし、私も理性が砕けるくらい飲んでいた。
この女を選んだら。恐らく、もう戻らずに済む。
「尻込みせんでええ。ウチがおる」
私は段々おかしくなると共に、この女が気に入ってきていた。ついに笑いを堪え切れず、涙を流すほど笑った。
こんなに笑うのは、あの日から初めてかもしれない。
「いいな、気に入った。お前にも私がいる」
立ち上がり、揃ってレジに向かう。割り勘になった。
鶴迫さんの足元は危なっかしく、思わず声をかけた。酒の回った陽気な返答が返ってきた。やっぱり彼とは違うんだな、と思った。いつも私が酔い潰される側だった。
ドアを開ける。ひんやりとした雨の匂いは、酔い覚ましには少し物足りない。
あまりにもふらついた歩き方を見かねて、私は腕を差し出した。
「ほら、掴まれ」
「梅辻さん頼りになるわ、惚れてまうでこんなん」
その言葉に、私の腕が一瞬遅れた。彼女の体がつんのめる。
ぽすん、と音を立てて彼女は私の胸に飛び込んだ。
沈黙を、『Lily』と名付けられたバーのネオンが照らす。
「あ、ありがとな……」

＊

「やけっぱちになって飛び出してもうて、傘が無いんよ」
すると、梅辻さんは傘に招き入れてくれた。
「ありがたいわぁ、神様仏様梅辻様やな」
茶化しつつお礼を言うと、梅辻さんは満更でもない笑顔を見せた。相合傘で歩き始める。
「しかし、この辺に他の店なんてあるのか？」
「無かったらコンビニでつまみでも買うて、そこのラブホにでも部屋を取ればええやん」
言ってから気付いたけど、割ととんでもないことを言ってのけたかもしれない。
「ばっ……な、何を！」
「あっはっは、変なこと考えたんやろ？　結構かわいいとこあるやん」
ウチはそうからかいつつ、内心ではさっきのぬくもりを思い出して少しどぎまぎしていた。
「そこまで言うなら、本当に惚れさせてやろうか？」
低い声に心臓がビクンと跳ね、えっ、と声が漏れる。
思わず梅辻さんの顔を見上げると、片頬を吊り上げてニマニマ笑っている。
「なんてな。かわいげがあるじゃないか」
「お、脅かすなや！　びっくりしたやん」
「ははは、すまんすまん」
ウチはぷうと頬を膨らませてから、一緒に笑い合った。
「そういや、駅の反対側にカラオケがあったんやけど、そこ行かん？」
「いいな。行こう」
「よっしゃ、決まりやね。ほな行こか」
楽しい夜になりそうやな……まるで、付き合い始めたばっかりの恋人同士が遊びまくる時のような。

＊

自棄になって飛び出した彼女は傘を持っていなかった。
「ほら、入るといい」
「ありがたいわぁ、神様仏様梅辻様やな」
「ふっ、何を言っている」
しかし内心では、こうやって感謝されることが嬉しかった。本当に久しぶりだ。相合傘で歩き出す。
「しかし、この辺に他の店なんてあるのか？」
「無かったらコンビニでつまみでも買うて、そこのラブホにでも部屋を取ればええやん」
私は少し慌てて、傘が大きく揺れた。
「あっはっは、変なこと考えたんやろ？　結構かわいいとこあるやん」
私はさっき胸に飛び込んできた感触を思い出し、顔の赤みを悟られまいと傘を深く下げた。何を言って反撃してやろうかと思案する。
「……そこまで言うなら、本当に惚れさせてやろうか？」
「えっ」
鶴迫さんはびっくりした表情を見せる。しかし、薄暗闇の中で微かに感じられる程度に……期待もないまぜになっていた。
「な、なんてな。可愛げがあるじゃないか」
期待の表情に、さっきの数倍くらい慌てた。どうにか誤魔化して、余裕綽々の笑みを取り繕う。
「お、脅かすなや！　びっくりしたやん」
笑いつつ軽く謝る。こちらの内心はばれなかったようだ。彼女のふくれっ面の後、笑い声は二つになった。
その後、鶴迫さんはカラオケに行こうと言い出した。こちらとて異存はない。楽しい夜にしよう。……付き合い立ての恋人同士のような、華やかな夜に。